

第16回委員会までに出された 天塩川河川整備計画に関する意見

治水に関する意見

(目標)

- ・ 既往最大規模の洪水に対して安全を保障すべき。
- ・ 近年発生しているような、経験のない降雨を踏まえて、最大限のレベルに視点をおいた治水対策を考えるべき。
- ・ 過去の洪水で酪農業などの産業に大きな被害を受けており、本州では豪雨の被害が非常に増えていることから、治水事業は今後とも積極的に取り組む必要がある。
- ・ 誉平は実績流量であるものの、名寄川では実績でそれほど流れておらず、名寄川の目標流量は下げたパターンを取ってはどうか。既往最大流量、氾濫面積の経過に最近の異常降雨を加味しても高過ぎる。
- ・ 実績が無いから放っておいてよいということにはならない。流域全体に目配りし、危険な状態を想定して計画を決めるべき。
- ・ 目標流量を下げると、20～30年はその低い目標で我慢するしかなくなる。

(外水対策)

- ・ 真勲別における河道の目標流量に対応するためには、真勲別より上流に洪水調節施設を作らなければならない。
- ・ 堤防の嵩上げには、全ての橋の架け替えや道路の付け替えが必要であり、非常に困難、環境面を考慮すると河道掘削をするにも限度があり、ダムや遊水地で洪水調節をしなければならない。
- ・ ダム案は長期計画の基本方針レベルにも対応可能であるが、遊水地案は基本方針レベルに対応するためには、さらに遊水地を拡大し、名寄川沿川の洪水防御対象区域内のほとんどの農地を潰さなければならず地域経済に与える影響が大きく、現実的でない。
- ・ 外水は内水以上に大きな被害となるので、まず外水から地域を守ることが必要である。
- ・ 漁業の面から、ダム建設について理解できないという意見が出されており、今後開発

局から漁業者に対して十分説明することが必要。

- ・ダムだけに頼るのは考え直した方が良く。遊水地は下流域や中流域の旧川やサンルダムの湛水予定地、名寄川流域で何箇所かを考えて行けばそれなりの効果はもてると思う。ダムを造るより、遊水地で洪水を貯留したり、川幅を拡幅することによって全域を含めた流下能力を高めることを考えたほうが良い。
- ・中下流域は、旧川の自然復元や緑地利用をあわせた遊水地の有効性が高い。
- ・中下流域に遊水地を設けた場合、それほど礫が流れ込むことはなく、大きな障害になることはないという印象を受けた。水害防備林によって洗掘を防いだり洪水の流れを緩やかにして被害を防ぐ方法もある。
- ・治水は大事であるが、河川法が変わった経緯を含めて、河道内に洪水を全部押し込めるのではなく、溢れるということも考えざるを得ない流れになってきていることを農家にも理解してほしいし、どこまでなら許容できるのか。
- ・外水氾濫の被害を受けた水田の復旧作業は大変。特に名寄川など急流域では大きな礫が流入したり、表土が流されるなど被害が甚大。数年は回復できないし、対応が個人にかかるとしたら大変である。
- ・中川町より下流は牧草地が多く、洪水で砂やいろいろなものが農地に入ると2、3年は牧草が取れないので、下流で遊水地を作ることは難しい。
- ・遊水地案の地役権の対価は地価の1/3であるうえ、北海道の地価は本州に比べ安い。一度洪水が入ったらそれだけで補償金は無くなるのに、その後何回洪水が入っても耐えるしかない。北海道では営農そのものが成り立たなくなる。買収した場合は広大な土地を提供することになり、地域経済が成り立たなくなる。別の方策を考えなければならない。
- ・遊水地案は、後継者を含め、農業者が今後営農するにあたり大きな不安を与えるので、農家の心情を考えると賛成できない。
- ・長い歴史と伝統の中で耕作されてきた農地を遊水地にするということは、食糧確保を担う北海道や農家にとって大変ショッキングである。仮にこういうことも考えられるという程度で議論すべき。
- ・耕作地は、土壌改良のために大変な苦勞をして暗渠排水などの整備をしているので、遊水地に活用するという考え方は大きな問題がある。
- ・国土交通省の施策としての輪中堤であるが、これはほとんど堤防ができていない地域で、安全度を下げ家屋は守るが生産緑地はどうしてもよいということにはならないと思う。
- ・遊水地について農家の立場からいうと、遊水地になった後の農地は1～2年では回復でき

ないし、誰が回復するのかという問題があり、賛成できない。

- ・堤防の整備について下流部は記述されているが、上流部についての記述も追加すべき。
- ・真勲別地点の堤防高は約109mあるので、1,500m³が流れて計画高水位の106.32mを少し超えることになるが、堤防高まで2m位の余裕があるので結局は溢れないで流せるのではないか。
- ・河川規模に応じて計画高水位に余裕高をプラスするのが基準である。

(内水対策)

- ・現在でも内水氾濫で水田に水がつくことが多いので、内水の排水を早急に対応すべき。
- ・水田は浸水が1尺24時間を超えると被害が出るので、内水の手当が必要。
- ・内水対策についてももう少し具体的に記述する必要がある。
- ・外水に対する安全度を上げるとともに、内水対策も必要である。

(その他)

- ・上流で洪水が無くなっても下流部で洪水が起こるので、全体的な洪水の考え方をしてほしい。
- ・剣淵川流域では、平成13年、14年も農業被害が出ており、これは支川の流下能力が河畔林で低下した結果である。河川の管理者が異なるが、流域に住む者として配慮願う。
- ・倒伏した河道内の樹木は、洪水時に流出し下流の漁業等に被害を及ぼすので、適切な対策が必要である。
- ・北海道管理の支川を含め流域全体として治水計画が見えるようにできないか。
- ・流域の貯留・保水機能の増進を図るといった趣旨の文言を入れるべき。
- ・山の保水能力がなくなり、また、雨が降ると河川に一気に流出しているようであり、その対策が必要である。
- ・農業について、水田などや維持管理する人々が治水にも貢献していることを意見として残してほしい。
- ・水田は遊水効果を発揮しているが、これは地域特性として河川計画の中に折込み済みである。水田が持っている遊水効果を過剰に評価するのは危険である。
- ・危機管理として、ハザードマップ等のソフト対策や光ファイバーを活用した堤防管理の他に、洪水時の具体的な施策が必要ではないか。
- ・光ファイバーを活用した情報共有など、関係機関との連携に積極的に取り組む必要がある。

利水に関する意見

(正常流量の確保)

- ・将来に北海道が我が国の食料の主産地としての役割を果たすためには、水の確保は重要な課題である。
- ・今の日本は食糧自給率が40%であり、食料生産に水が必要であることから水の輸入国と言われている。干ばつ等を考えると水のストックをやっておかなければ大変なことになる。
- ・ダムによって安定的に水が得られることは効力があるとともに、真勲別頭首工における工業用水や上水道の取水について安定的な運営や利用ができる。
- ・利水をあきらめることについては環境との折り合いについての議論となる。
- ・正常流量を下回るような流況が頻繁に現れる状況であり、満度に取り水できないことがある。
- ・気象条件や農業事情の変化などから当初計画した利水計画が厳しくなり、農業用水に少しでも余裕が欲しい。
- ・河川環境を損なわずに十分な水が取れるような流況にしてほしい。

(水道用水)

- ・水道については、名寄川は夏の渇水期に水量が足りなく臭気が発生しており、また名寄市と風連町が合併して地下水に替わる水道水源をどこに求めるのかという利水の問題解決が先決である。
- ・名寄市の人口が減少しているので、ダムによる新たな水は必要ないという指摘が前回あったが、人間が生活していく上で過去よりも現在の方がずっと多くの水を必要としており、地下水を使っている風連町との合併や自衛隊からの水道供給の陳情もあるので、ダムによる利水が必要と考えている。

(その他)

- ・正常流量は流量が確保されていれば良いというだけではなく、利水施設については、水深等を含めて対処することが必要である。
- ・上流の旧川については利水面で貢献している例がある。旧川が、利水面とも関連した重要な地域資源である実態をどこかに記述できないか。
- ・岩尾内ダム下流の無水区間を改善するような環境放流が記載されているが、原因と改善の方向についてわかりやすく記述した方が良いのではないか。

環境に関する意見

(目標等、考え方)

- ・ 目標は、現状把握を行ってあるべき姿を定め、今後30年の計画期間内に具体的にどの部分を実現するというような計画を立てるべき。
- ・ 整備計画の環境の目標は、復元に関する目標も検討した方が良い。
- ・ 自然環境については努めるという記述が多く、課題が徹底されていない。保全するとか場合によっては自然再生していくといった視点が薄い。
- ・ 特定種、貴重種を見る視点が必要ではないか。

(サクラマスをはじめとする魚類)

- ・ 日本海側の漁獲量が100万尾から50万尾くらいまで減っており、日本海側では天塩川は大事な位置を占めていると思う。去年と今年の天塩川のヤマメ生息密度は、サンル川よりも高い所が2~3支川あるが、サンル川水系の密度が高く非常に大事だと思う。
- ・ 魚類の移動経路の確保にとどまらず、再生産を可能とするような河川環境の保全が最終目標になるのではないか。
- ・ 工作物等で到達できなくて産卵ができない箇所をいかに改善するかが問題であろう。
- ・ 本川で魚を上流にあげる事業を展開しているのに、支川に入ると魚道が機能していない状態がある。管理者が別であるが、改善することで昔のように支川に魚が遡上し産卵することに期待する。
- ・ 魚道の管理は非常に重要である。小さな支流の魚道は、水が流れていなかったり、枝が詰まって利用できないものが結構ある。
- ・ 産卵可能域が年次を追ってどのように改善されていくのかを明確にする必要がある。
- ・ サクラマスの生息数が減少しているという現状認識を記載しないと計画が出てこない。
- ・ サクラマスが減ると、絶滅危惧種のカワシンジュガイにも影響を与えるので、慎重にならざるを得ない。
- ・ 用排水路は樋門を介して川と通じており、流域の自然環境を保全する上で重要であり、流域という広がりを持たせている。水路や水田は水を媒介する生物にとって大事な役割

を担っていることから、樋門については単に管理施設として記述するのではなく、水路を含めて、自然環境面での重要性を記述してほしい。

- ・樋門を通じて旧川と本川が行き来できるような現状になっているのかどうか、もし行き来ができないようであれば、できるような状態にしてほしい。
- ・岩尾内ダムに将来的にサクラマス等に配慮した魚道を考えてはどうか。
- ・ニジマスの放流により、川の生態系が変わっている。ため池の大きなニジマスの腹には、ウグイ、ヤマメ、ドジョウなどが入っている。在来の魚類が変わるのではないかと思っており、キャッチ・アンド・リリースではなく、釣ったニジマスは持ち帰って欲しい。
- ・全国的にニジマスは余り良い影響は与えないだろうと評価されているが、ニジマスがどの程度在来のサケ科の魚に影響を与えているかは把握しづらい。
- ・魚道がどのくらい機能するのか既設の魚道で調査するとともに、本当に有効かどうかを実験するのが重要。
- ・サンル川の生息密度は一番高く、これは支川にある砂防ダムや横断工作物などによる影響を相当受けてきていることによると考える。今後、支川にサクラマスが遡上出来るようにどういう対策を取るかが大事である。また、サンル川のサクラマス資源をどう保全していくのか、ダムとの関連でどういう影響が出るのかを検証していく必要がある。
- ・サンルダムをつくった場合、サクラマスを中心とする魚類の遡上とともに、サンルダムは流れが緩やかなので降下への直接的な影響が考えられる。
- ・サクラマスが減少し、砂防ダムが数多く造られている現状で、サンル川が重要な資源を供給する場となっている。問題は、サンルダムの魚道が有効に働くのかがわからないことであり、実際にあれだけ大きなものを造るのであれば、何年か時間をかけて実際に有効であることを示すべき。サンル川のダムについてはもっと慎重であるべき。
- ・サンルダムは自然型の魚道を設置すると聞いているので、その効果に期待したい。
- ・サンルダムの魚道は、美利河ダムとイメージが似ており、魚が上れるような印象を受けた。いろいろな知恵が働かされて、良いものができると思う。
- ・天塩川上流の金川、銀川で、昨年秋にサクラマスが多く確認できており、習性どおりに自然に降下して遡上したのではないか。そこまでに頭首工が5つ程あり、堰になっているところを上っていることから、サクラマスは相当力のある魚で魚道を上ることができないということは考えられない。

- ・魚道の設置などの努力で相当量の資源の減少を防ぐことができるし、またその努力が必要である。この委員会としては、ダムだけで対応するのではなく遡上困難となっている横断構造物の問題の解決やスポーツフィッシングをやめるなど積極的に取り組んで、資源量を今以上に増やすような流域全体としての努力をお願いすることになるのではないかな。

(漁業)

- ・サンルダムについて、サクラマス資源も含めた河川環境への悪影響や河口海域への濁りなどの漁業影響も懸念されることから、ダム本体工事の同意はできない基本姿勢で臨む考えでいる。
- ・天塩川のシジミは、高い評価を受けており、漁業資源への影響の懸念に関して、引き続き下流部の漁業者等と十分話し合いをしながら進めてほしい。
- ・ダムの話に終始しており、下流域で生活の糧として漁業を営む住民が影響を被ったときに、誰が補償できるのか。
- ・流域で生活の糧として漁業を営んでおり、慎重な議論、流域全体の話をするべき。

(旧川)

- ・環境的に良いといえない旧川が見受けられる。今後、少しずつ環境を改善して欲しい。
- ・旧川は田畑からの負荷を受け入れて、本川に対するバッファ機能があるので多少汚れても良いという考えもある。
- ・振老旧川は、現在はほとんど水の流動がないが、今でもシジミ貝などが生息していると聞いており、流れのある旧川にできないか。

(河畔林、植物、河道の変動等)

- ・現状の河畔林はヤナギ林が多く、本来の自然環境ではない。本来の川であれば下流部の自然堤防の上には、ハルニレやヤチダモがあることが大事である。治水に支障のない範囲で河道の変動を許容し、ハルニレ・ヤチダモに少しずつ転換してほしい。
- ・河畔林はそのままでは洪水時に流出して魚網を痛めることになりマイナス面が大きい。河畔林は倒れそうなものを前もって伐採し最後まできちんと管理すべき。
- ・河畔林の縦断的連続性だけでなく横断的連続性の回復が課題である。

- ・旧川を含めて河畔林、生態系の連続性を再生してほしい。
- ・外来種が多くなった河川敷の植物を在来種に戻していくことが課題になる。
- ・河川環境で大事なのは、河道が災害を起さない程度に変動することを許容することである。流水が河床の土砂を洗掘して運搬堆積し、瀬淵が形成され、生物が棲むという変動の中で河川の環境が豊かになることを位置づけて欲しい。
- ・魚の再生産を促したり、水質に関連する樹木のほか、草やプールをも考慮するような方向で将来的に取り組んで欲しい。

(水質)

- ・人が安心して川で遊べる水質を確保するという目標を掲げる必要があるのではないかな。
- ・夏場のカヌーに良い時期に泡が海まで続いているので、流域住民が協力して改善するよう提言できると良い。
- ・長い期間環境基準値内の水質を維持している実態と河川環境の保全・改善を考えた場合、道に環境基準値の見直しを意見として申し上げるべき。
- ・自然浄化への配慮が必要であり、ヨシなどの豊かな生態系になることによって水質は良い方になっていく。単純に法的な規制等だけでは変わってこないのではないかな。
- ・イバラトミヨやサロベツ川のイトウのように泥炭地に生息する特殊な魚は多く、汚い、きれいなど見た目だけで判断すべきでない。
- ・より良い剣淵川の環境にすることが流域住民の責任であると思うので、支援をいただくとともに長い目で見てほしい。
- ・ダムを造ると水が濁るとの意見があるが、ここでは事実ではない。下流で濁っているのは流域として産業や農業、水害などの問題があるからである。
- ・都市部の負荷があるということを示したほうが良い。
- ・水質は周辺環境で決まるので調査の特記事項に水田や工場などの周辺環境について記述すると今後役に立つ。
- ・水質保全の取り組みについては、緊急時にだけ重点を置くのではなく、平常時にも連携をとれるかが重要。

(親水活動、環境教育)

- ・カヌーポートの整備や「川の駅」、岩尾内ダム直下からのラフティングが出来る環境整備を盛り込んで欲しい。
- ・河川空間の利用や人と川とのふれあいに関する整備の全体像についてイラスト等の入った図面があると良い。
- ・住民と連携した水の環境教育について継続した取り組みをして欲しい。
- ・川の施設は遊び心があり、子供や高齢者も含めて楽しめるトータル的なランドデザインでできれば素敵である。
- ・可能な限り昔の姿に、例えば浅瀬があって子供達が足を入れて遊べるようなことに配慮して改修して欲しい。
- ・ふれあい、観光、子供の環境教育等との関わりの中でトータル的な川の駅を整備して欲しい。

(その他)

- ・サロベツ川について、関係機関と連携して施策を進めることを記載してほしい。
- ・確認された動植物の記述となっており、もう少し考えて欲しい。
- ・今後のハードの整備と合わせて関係機関と連携しながら、モニタリング調査や効果の検証等に引き続き取り組んでいくのであれば、整備計画の中にもそれらの考え方や環境基準の問題についても文言を整理して記載してほしい。

治水・利水と環境のバランスに関する意見

- ・名寄川の水量が減っており、臭いや色の処理が生じている。ダム建設による水道料金の値上げの問題もあろうが、水の安全度が上がる。減水がある事実の中、委員会で3年間議論を続け、流域住民が利水・治水の面で放っておかれて良いのか疑問である。
- ・地域住民としては、治水・利水が守られた後で環境を考えていくということで進めて欲しい。
- ・治水を第1優先にするのは基本であり、そのあとに環境や利水を考えるべき。
- ・環境の世紀と言われる中、漁業関係で海獣等の取り締まりでも共存共栄が言われており、人間重視が適当なのか。
- ・環境との調和という視点で、遊水地が良い。
- ・ダム以外の方法で治水などが対応可能であればそれを模索すべき。どうしてもダム以外にないのであれば、環境への影響を少なくする方法になるが、総合治水、遊水地が本当に不可能なのかどうかをきちっと検証した上でなければならない。
- ・利水を放棄すればダム高を低くできるが、ダム案は治水、利水とも満足させることができ、最も効率的である。遊水地案では水の手当はできない。利水まで考えるとダム案が良い。
- ・既にあるダム案を前提にしないで、利水を減らし、生物との関係で作るとしたらどのような構造のダムがよいのか。
- ・ダムの容量配分として、洪水容量とほぼ同じくらいの利水容量を持っており、これはダム計画とあわせて確保するもの。これがいらぬということになれば、ダムの高さは低くなるが治水と堆砂容量が残る。
- ・治水とあわせて利水の視点を持って、人間の生命と財産をしっかりと考えて議論しなければならない。自然をいたずらに破壊するのではなく、自然と共生し、マイナス面があればフォローアップするという視点で議論すべき。
- ・地域経済を維持し発展させるためにも遊水地案よりもダム案がよいと思う。魚類等に関する問題点については、別途議論をしてその解決策を提案していけばよいと思う。
- ・治水対策は地域住民が楽しく永く住めるような環境となるものであってほしいので、3案のうちから地元の方が選ぶべきであり、その選んだ内容に対し、環境としてはこういうことが考えられるということをお話したい。
- ・自然は予想しがたい大きな変化が起こりいつもパーフェクトにやっていけるものではないということを念頭において、現実に困っている治水や利水について議論すべき。

- ・ダム案と遊水地案はどこかで選択し、その一つの結論に基づいて環境、治水、利水のあらゆるところから折り合いをつけながら検討することが大切。
- ・天塩川の遊水地は、今ある堤防を壊して造るので当初から反対。農家の立場として、100年近く守り育ててきた農地を遊水地にすることに農家が賛成できるか。ダムか遊水地かは、総合的な治水計画の中で生活の営みをどのように守っていくのかを第1に考えてほしい。さらに治水計画を進める中で、自然との共生について考えたい。
- ・地域が農業を基盤としていることを認識して、治水、利水、環境のうち、何を優先していくかについて配慮すべき。住民が一定の生活を維持でき、そして周りの環境改善や修復等を行うべき。
- ・環境に対するスタンスとしては、ダムを造ればそれなりの影響が出ると思うが、人間を優先しつつも、自然との折り合いが必要。ダム以外に適当な方法がなければダムを造るべきであり、その影響を最小限に努力していくべき。

その他の意見

- ・「流域及び河川の概要」は現在のことだけではなく、開発により河川環境が激変した50年前の環境はどうだったかということを入れて欲しい。「河川の適正な利用および河川環境の現状と課題」では環境の課題を入れてほしい。
- ・「流域及び河川の概要」で主要支川、特に名寄川の記述があった方が良い。
- ・天塩川は南北に長いのが特徴であり、稲作の北限によって生活や河川のシステムが変わっていくことを記述して欲しい。